

CREVICE

1966 HARLEY-DAVIDSON FL



最小限のフォルムの中で作り込まれた造形美

一見、オーソドックスなスタイルだが、その実、極めてナローなフォルムの中にアイキャッチとなるディテールを詰め込んだ独特の緊張感が漂う一台。SURESHOTの相川氏が製作したこの「CREVICE」は、シンプルに見えながら一貫したコンセプトに沿った緻密なディテールワークが散りばめられている。

このマシンの軸となるのは安心して走れる耐久性重視のエンジン性能と、贅肉を削り落としたナローなフォルム。そして、見た目はオールドスクールで見えない部分は最新の技術を注入するのがこのマシンにおけるカスタムポリシー。エンジンはあくまでも過度なホップアップは避け、ハイカム以外はストックのスペックに準じたフルO/Hを施し、デスピのケースにフルデジタルの点火モジュールを内蔵。さらに、2基掛けのDCキャブは吸気効率の強化だけでなく、コンパクトな車体の中で心臓部の造形美を際立たせる効果も担っているのは一目瞭然だ。

「ツアラーすらも引く張る大排気量エンジンで軽い車体を走

らせるのがボバーやチョッパーの醍醐味であり、ホットロッドにも通ずるもの」と語るように、外装をコンパクトに作り込み、ウィールなど足廻りは国産のオフロード車パーツを流用して軽量化に成功。さらに、幅を詰めて作り直されたダウンチューブや車体の内側に入り込むようなラインを描くマフラー、分割タンクをプレートで隠してタンクの中にシフトが組み込まれているかのようなディテールなど、H-Dの骨格の限界の細さを狙って作り込み、その中でステー類にはさりげなく主張する造形美を持たせることでデザイン性を高めている。

この「CREVICE」のフォルムは、隙間を意味するそのマシンネームの通り一つ一つのディテールに繊細な神経を行き渡らせ、全てのパーツの配置まで計算し尽くして生み出されたもの。デザインと走りの両立を狙う緻密なモディファイが、無駄を削ぎ落とした最小限の装備の中で唯一無二のデザイン性を創造する、まさにその真意を具現化した一台だ。

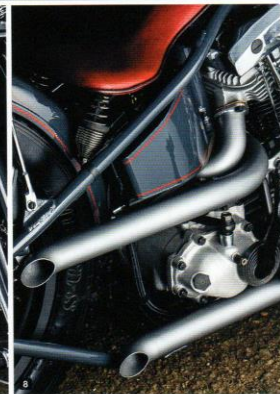
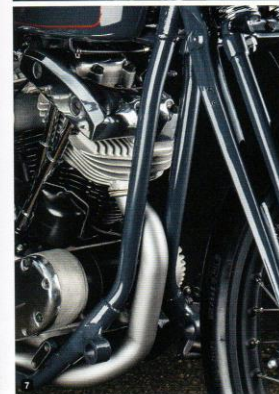
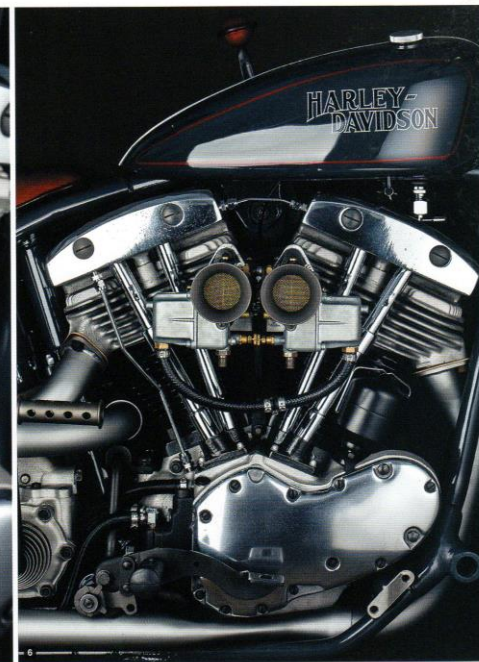
CREVICE

外装パーツを極力コンパクトに設計して贅肉を絞り込んだナローなスタイル。ラグ風にロウ付けで製作したファンダーステーなど最小限の装備の中でデザイン性を高めている。



①ナローなスプリングフォークは、VLのリアレグを部分的に残してワンオフで製作。さらにW&Wのガスダンパーを採用して、走行中の振動を抑えるモディファイを施している。②フォークの幅を詰めているため、フロントブレーキは国産モトクワッサーのハブドラ

ムを流用。リムもオフ車用のアルミリムを使用して軽量化を図り、ブレーキまで全てセラコートでブラックアウト。③ワンオフでハンドルバーをインナースロットル化。④タンクはスポーツスタータンクを7対3で分割して、その間にシフトレバーを組み込んでいる。



⑤⑥エンジンはストリートでの耐久性を重視するため過度なチューンは避け、フルO/Hに加えてハイカムをインストールしたマイルドなホップアップ。さらに点火はフルデジタルのダイオ2000i。バッテリーは軽量なりチウムを採用。キャブレターのマニホールドはS&Sツースロットルを採用。通常片側に張り出したDC10キャブレターを前後反対に装着することでツインキャブ化することに成功。⑦ダウンチューブはネック下でチョップしてナローなストレートタイプに加工。⑧車体全体の細さをコンセプトとしているため、マフラーもオイルタンクやミッション下の隙間を縫って極力内側に入るラインで設計し、フレームに干渉するギリギリのところをターンアウトさせている。

⑨クラッチを乾式化してシフトをワンオフで製作。レバーのドリル加工など細部までぬかりない。⑩エンドが隆起したリアフェンダーは一枚のフェンダーの上にぴったりと重なり合うプレートを製作してロウ付けで仕上げている。⑪サドルシートはシートベースとスポンジ

の整形までシュアショットが手がけ、レザーの着色と縫製はスタジオ ウォーニが担当。手塗りのホースヘッドはムラ感があり、経年変化することを狙ったディテールだ。さらにステアーの上下で異なるピッチのスプリングを装備して様々な衝撃に対する吸収性を高めている。